

災害時協力井戸を募集しています

地震などの災害により長期間断水すると水の確保が難しく、家庭で使う生活用水は不足すると予想されます。「災害時協力井戸登録制度」は、事前に登録してある井戸を活用して、災害時の生活用水を確保するための制度です。井戸所有者の皆さんの協力をお願いします。

▶問い合わせ
本総務課 ☎0287(62)7150



安全安心に生活するために

自治会に加入しよう！

自治会は皆さんに一番身近な自治組織です。

いざという時に身近に頼りになる人がいますか？
自分の住むまちをもっと良くしていきませんか？

安心安全に生活をし、もっと住みやすい地域にしていけるために自治会に加入しましょう！！



▶問い合わせ
市民協働推進課 ☎0287(62)7151

当時の自治会長に聞く 水害を振り返って・・・

当時、消防団の人が鳴らしてくれたサイレンで火災か何かかと思えば外に出ると、今まで見たことのない水量の余笹川が目に入りました。

農地への被害も深刻で、収穫を前にした水稻はなぎ倒され、余笹川からあふれる濁流に乗ったゴロゴロとした石によって、田んぼが河原になってしまいました。あの災害が乗り越えられたのは、地域の人の助け合いがあったからこそです。



那須水害の状況を語る
当時の自治会長 高久耕平氏



地域の人やボランティアの人など、力を合わせて災害ごみの撤去を行った



多くの人が協力し、復旧・復興に取り組んだ

用の飲料水などが備蓄されている。各家庭でもこの意識の高まりは見られ、「この家でも2、3日分の非常食などはあるのでは」とのこと。

一方で、今も地域のつながりは強いが高齢化が進んでおり、将来への不安も垣間見えた。石田坂・赤沼地区に限らず、自治会の人不足、高齢化は多くの地域の課題だ。「同じ地域の中に住んでいても、名前も顔も分からないと何かあった時に困ると思う。若い人に地域のつながりの大切さが伝わり、少しでも地域活動に顔を出してもらうだけでお互いを認識できる。そうやっていけばいいですね」と高柳さん。いつ起きるか分



石田坂公民館にある備蓄品の数々。地域の防災拠点としての役割を担っている

からないその時のためにも、日ごろの地域のつながりを大切にしたい。

災害を乗り越えた 地域の力



本市の中で、那須水害による被害が最も大きかった余笹川沿岸の石田坂・赤沼地区。深刻な被害を受けたこの地区の人たちは、那須水害にどう向き合い、どう乗り越えたのか。当時の石田坂・赤沼自治会長 高久耕平氏と、現在の自治会長 高柳秀樹氏に話を聞いた。

早朝に響く川からの「異音」

「川の音が違う」と異変を感じた高柳さん。余笹川を見ると「ガランガランガラン」と音が響き、濁流に乗って大きな石が流れていたという。

当時、石田坂・赤沼地区の被害は深刻で、寺子橋が一部流出。家屋などには大量の土砂を含んだ河水が流れ込み、急激な水位の上昇により一人の尊い命が奪われた。飼っていた牛の大半が死んだり、流されたりしてしまっただ酪農家もあり、梨園を営む高柳さんも自宅が床上60、80cmの浸水、梨の木の一部が流されるなどの被害を受けた。

地域での「助け合い」

被災した時に行政の救助を受けるまでの間、重要なのが「減災」への取り組み。石田坂・赤沼地区では、地元の消防団の人たちがサイレンを鳴らして沿岸の住民に避難を促したり、土のうを作ったりしたほか、交通整理も行った。

「この地区は皆若いころ消防団に入っていた人ばかりだったから、誰でもサイレンが鳴らされたし、土のうも作れた」と高柳さん。避難指示なども日ごろの地域のつながり 덕분에誰が住んでいるか分かっているからの確に行うことができたそう。被

災して一番大変だったのが家屋へ流入した災害ごみの撤去。これらの作業も地域の人やボランティアの人で行われた。

消防団などの地域活動の経験と、比較的被害の少なかった地区の人が率先して動き助け合った結果、災害を乗り越えた石田坂・赤沼地区の皆さん。日ごろの地域のつながりの大切さを再認識した出来事となった。

あの経験を生かして

那須水害後、地域の防災意識は「非常に高くなった」という。現在、石田坂公民館には、当時はなかった発電機やヘルメット、懐中電灯、非常



流された寺子橋跡を指さす 石田坂・赤沼自治会長 高柳秀樹氏